

「AON」伝説の大舞台



東京ゴルフ倶楽部（GC）は今年10月、「日本オープン」を開催する。

昭和最後の日本オープン



2012年の日本オープンで同じ組となった（左から）中嶋常幸、青木功、ジャンボ尾崎=12年10月12日

れている。

最終18番の攻防

初代王者の赤星六郎は、アマだった。そして2022年、蟬川泰果が95年ぶりに史上2度目のアマでの優勝を果たした。

「ナショナル・オープン」とも呼ばれ、会場は一つのゴルフ場の固定ではなく全国の名門コースで開か

最多開催を誇るのが東京GCだ。今秋の第89回大会で、8度目となる。

歴史ある日本オープンの中で、「1988年（平成）ペスト・ゲーム」と評するゴルフ関係者は少なくない。

時代は、青木功尾崎将司（ジャンボ尾崎）、中嶋常幸

の「AON」が火花を散らしていた。85〜92年の日本オープン

は、8年連続で3人が優勝を分け合っている。AON全盛の88年。昭和最後の日本オープン。最終日の最終18番ホール

の戦いが、この試合を「伝説」へと昇華させた。

首位は4オーバーのジャンボ尾崎。青木は、一足先に1打差でホールアウトしていた。最終組に、同じく1打差の中嶋と、首位のジャンボ。優勝は「AON」に絞られていた。

東京GCの18番ホールは、パー4だ。

中嶋は1打目を右に曲げ、ラフへ。残り200ヤード。くるぶしにかかるほど伸ばされた深い芝は、アマチュアなら出すだけで精いっぱいだろう。中嶋は何とかがグリーン手前に運んだ。

ジャンボの1打目は、絶好の位置へ。中嶋のミスショットを考えれば、ここから「乗せて2パットのパー」で、優勝だ。

2打目。だいぶ距離は残ったがグリーンに乗せた。

次は中嶋の3打目。だが、ミスを重ねた。ピンにからめられず、ショートした。気持ちが楽になったジャンボの3打目は、カップの手前70センチ。これを入れれば、優勝だ。

中嶋の4打目。長いパー

パット。ここで執念を見せる。7センチをねじ込み、パーをもぎ取った。一転、わずか70センチを残すだけのジャンボに、重圧がかかった。

ジャンボに異変

4日間の戦いを締めくくると、ウィニング・パット。入れば、優勝。外せば「AON」3人のプレーオフ。プロなら、目をつぶっていても、100回打って100回入る距離だ。だが、異変が起きた。

パターを構えたジャンボが、この70センチのパットを打てず、構えを外したのだ。仕切り直しの2度目。だが、ジャンボは再びアドレスを外した。ギャラリーのどよめきに包まれた。

元NHKの島村俊治アナウンサー（82）は、目の前でそれを見つめていた。あのジャンボ尾崎が、震えていたという。そしていま、島村さんはこう振り返る――。

（抜井規泰）

東京ゴルフ倶楽部110年

朝日新聞【埼玉版】

2024年（令和6年）2月27日（火）掲載

東京ゴルフ倶楽部110年

朝日新聞【埼玉版】

2024年（令和6年）3月5日（火）掲載

ジャンボの緊張 心震えた

元NHKアナ、見つめた最後のパット



1988年の日本オープン。そのウイニング・パットは、わずか70センチ。

しかし、優勝目前の尾崎将司（ジャンボ尾崎）は打つことができず、2度アドレスを外した。

日本オープンには毎年、NHKが中継している。元NHKの島村俊治アナウンサー（82）は、優勝インタビュの担当だった。最後のパットを、すぐそばで見つめていた。

「震えていたんですよ。あのジャンボが」

島村さんは、この年のソ



元NHKの島村俊治アナウンサー

明に覚えています」

たったの70センチ

ウル五輪・競泳男子1000メートルの鈴木大地の金メダル、4年後の92年バルセロナ五輪・競泳女子200メートルの岩崎恭子の金メダルの実況でも知られる名物アナウンサーだ。

「ソウル五輪最終日の男子マラソンの実況を終え、帰国した10日後でした。鮮

たった70センチ。プロなら目をつぶっていても入る距離だ。だが、ジャンボは震えていたという。外すかもしれない。そうならばAON（青木、尾崎、中嶋）3人

のプレッシャーとなる」。島村さんは、こう振り返る。「実は、私も緊張していました。しかし、インタビュアーは決して、それを表に出してはいけません。自分の緊張が選手に伝わってしまつと、心を開いた受け答えにならなくなってしまう。震えるジャンボを見ながら、緊張を共有していました。『いま俺の心も震えているよ』と」

2度の仕切り直しのうちに70センチのパットを沈め、ジャンボは74年以來、14年ぶりの「ナショナル・チャンピオン」に返り咲いた。

直後の優勝インタビュ。島村さんは、こう語りかけた。「ジャンボ、おめでとう。ずいぶん最後、しびれましたねえ」

緊張した面持ちだったジャンボはようやく笑みを浮かべ、安堵を口にした。

「もうねえ、手がね、震えてね。動かないです。本当に」

「これが、ジャパンプオープンでしょうね」

ジャンボは数年前からス

ランプに苦しんでいた。だが、この勝利の翌週、翌々週と3週連続で優勝を果たし、完全復活。その後、日本ゴルフ界に君臨した。ツアー通算94勝、賞金王12度、メジャー20勝は、2位以下に影すら踏ませない歴代最高記録だ。

あの年の勝者は

ジャンボ復活の起点となった88年の日本オープン。島村さんは、こう語る。

「ジャンボの優勝スコアは通算4オーバー。これは、プロとして恥ずかしい数字ですよ。ゴルフは、目の前の相手だけではなく、コースとの戦いでもあります。あの年、東京ゴルフ倶楽部はトップ選手全員を相手に戦い、誰ひとりとしてアンダー・パーで回ることが許さなかった。試合は、ジャンボが制しました。しかし、勝ったのは東京ゴルフ倶楽部だったのではないでしょうか」

（抜井規泰）

東京ゴルフ倶楽部110年

朝日新聞【埼玉版】

2024年（令和6年）3月12日（火）掲載

16番ホールに宿る「何か」

88年「AONの死闘」解説・川田氏に聞く



崎将司（ジャンボ尾崎）、ファンが待ち望んだ「AONの死闘」が繰り広げられたのが、この年の日本オープンだった。ただ、3人による最終日の優勝争いは、そうそう見られるものではない。

ベテランのゴルフファーマー、「川田太三」の名前をご存じだろうか。ゴルフ評論家でゴルフコース設計家の川田さん（80）は長年、NHKのゴルフ中継などで解説を務めた。
東京ゴルフ倶楽部（GC）で開催された1988年の日本オープン。川田さんは「日本ゴルフ協会」（JGA）の競技委員としてコース設定を手がけた。ピンの位置（グリーンにカップを切る位置）を決めたのも川田さんだ。
ゴルフ界は、青木功、尾



1988年の日本オープンでジャンボ尾崎に敗れた（左から）青木功、中嶋常幸。右端は細川護貞・日本ゴルフ協会長（当時）

テレビ中継の最後に、こう漏らしている。「非常に肩が凝りました。どういう進行になるのか、まったく分かりませんでした」

展開がガラリと

いま、こう振り返る。「終わってみれば、優勝争いを1打差でAONの3人に収めてしまった。試合後、いろいろな人が私にこう語りました。『さすが、東京GC』。さすが、本物』と。その通りだと思えます。コースの威厳というか、見えない力を持っているんですよ。東京GCは」



1988年の日本オープンを制したジャンボ尾崎=いずれも東京GC提供

その「見えない力」は、どこに宿っているのか。川田さんは「16番ホールですよ」と語る。東京GCの試合では、16番が起点となって展開がガラリと変わるコースを何度となく見てきたという。「16番で『物語』が起きるんです。88年の日本オープンもそうでした」

節目担う「義務」

川田さんが感じる、東京GCとは。「前回、東京GCで日本オープンが開催されたのは2001年。日本にゴルフ場が生まれて100周年という記念の年でした。『節目は東京GC』。それが当然、それが義務という、そんなゴルフ場なんですよ」日本ゴルフ協会が創立100周年を迎える今年、日本オープンでは東京GCで開催される。

（坂井規泰）

東京ゴルフ倶楽部110年

朝日新聞【埼玉版】

2024年（令和6年）3月19日（火）掲載



21

大会に向け難コース化

男子最高峰「日本オープン」主催



日本オープンの舞台となる東京GC＝埼玉県狭山市、東京GC提供

1924年に設立された日本ゴルフ協会（JGA）創立100周年を迎える今年、男子ゴルフの最高峰「日本オープン」を東京ゴルフ倶楽部（GC）で主催する。

ただ、トップ選手が集う試合を開催するには、様々な「苦労」が伴う。1924年に設立された日本ゴルフ協会（JGA）創立100周年を迎える今年、男子ゴルフの最高峰「日本オープン」を東京ゴルフ倶楽部（GC）で主催する。

高速グリーンに 何よりも大切なのは、最高峰の舞台にふさわしいコースコンディションを整えなければならないこと。コースの難度を上げるのだ。

水野勝之・史料室部会長（80）は「恥ずかしいくらいハンデイが増えますね。間違いない」と苦笑した。コースが難しくなるだけではない。日本オープン開催に向け、東京GCは多額の費用も負担しなければならない。（抜井規泰）

まず、グリーン。ボールに軽く触れただけでどこまでも転がってしまうような、ガラス面のような高速グリーンに仕上げる。次は、ラフ。フェアウェイを狭くするためにラフの範囲を広げ、芝の長さは現在の4・8センチから15センチまで伸ばす。ゴルフ好きならご存じだろうが、20センチのラフにボールを入れたらまず見つからない。ロストボールは1打罰。運良く見つけれられても、ラフから脱出するだけで精いっぱいだ。そんなコースで、スコアが100を切る程度、いわゆる「アベレージゴルフ」がプレーしたら、どうなるか。ボールを大量に失い、スコアはボロボロに崩れるだろう。

ラフの拡張は昨秋には終了している。すでに、難コースに変貌しつつあるのだ。試合が終わっても、伸びし続けてきた芝をいっぺんに刈ることはできない。時間をかけて元に戻していく。東京GCのグリーンキーパーは「半年から1年はかかりそうです」と語る。多額の費用負担 ゴルフは、ハンディキャップがあることによって上級者と初心者が一緒に楽しめるスポーツだ。スコアからハンデイを引いた数字で競う。うまい人ほど数字が減り、ハンデイ1桁の上級者を「シングル」と呼ぶ。

東京ゴルフ倶楽部110年

朝日新聞【埼玉版】

2024年（令和6年）3月26日（火）掲載

最高の4日間準備に2年

2グリーン・バンカー…名門の意地と誇り



日本ゴルフ協会（JGA）が創立100年となる今年、男子ゴルフツアーの最高峰「日本オープン選手権」は東京ゴルフ倶楽部（GGC）で開かれる。

そもそも、JGAは東京GGCで生まれた。1924年10月17日、当時の国内を代表する7クラブの関係

者が東京GGCに集い、会議が持たれた。呼びかけ人は、東京GGCの大谷光明。この2年前に開かれた英国皇太子との親善試合で、昭和天皇とペアを組んで戦った名選手で、東京GGCの現在のコースを設計した人物だ。

ゴルフ界の節目となるビッグイベントの多くが、東京GGCで開かれてきた。外国人の手で兵庫・六甲山に国内初のゴルフ場が誕生したのは1901年。その100周年にあたる2001年に、日本オープンが開かれたのも東京GGCだった。

1週間は休業に

日本オープン開催は、史上最多8回目となる。ただ、最高峰の試合には大きな負担も伴う。コース難度を上げる点は前回触れた水野勝之・史料室部会長（80）は「詳細は伏せますが、お金もずいぶんかかってごまか」と語る。

東京GGCのコースは「2グリーン」といい、18ホールすべてに二つのグリーンがある。グリーンを「朝霞」「知々夫」と呼び分けられており、芝の状態どちらを使うか決めている。

通常営業ではその日の使用グリーンを統一しているのだが、今年の日本オープンではより難度を上げるため、ホールによって朝霞グリーンを使ったり知々夫グリーンを使ったりする。

「困ったことになりました」と語るのは、コースの管理責任者であるグリーンキーパーだ。朝霞グリーンを取り囲むバンカーの砂は、5年前に入れ替えた知々夫より9年ほど古い。そこで、どのバンカーでも均

一な状態でプレーできるよろに、真っ白な砂を2年がかりで入れ替えた。

我々がやらねば

大瀧守彦・広報委員長（69）は「試合は、予選と決勝のわずか4日間。しかし、準備は2年がかりです。お金もかかります。しかし、JGA100周年の記念大会は我々がやらなければなりません」と語る。

現在の駒沢オリンピック公園で誕生し、昭和天皇が繰り返しプレーを楽しみ、「朝霞市」の地名を生んだ東京GGC。時代の激動に巻き込まれながらも、日本ゴルフ界の中心としての意地と伝統を守り続けてきた名門は、創立110周年を迎えた。

（抜井規泰）

◇「東京ゴルフ倶楽部110年」のすべての記事を朝日新聞デジタルでお読みいただけます。